

# バルセロナ日本語で聖書を読む会

月報第 148 号 [2017 年 6 月]

## さあ、湖の向こう岸に渡ろう

ルカによる福音書 8 章 22 節

『そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。』

主の聖名を賛美します。バルセロナ日本語で聖書を読む会の月報第号をお送りします。今月はルカ福音書 7 章の続きを読み進め、11 節から 17 節について学びました。

このテキストでは故郷ナザレに近いナインの町の入り口で主イエスが葬儀の列とすれ違い、たったひとりの身内だった息子の死を嘆き悲しむ母親を心から憐れに思い、歩み寄って声をかけ、棺に触れて息子を生き返らせたところ、群衆がイエスについて、彼こそ大預言者の再来だと口々に言ったという内容で、ルカ福音書にしか書かれていない。

当時の未亡人には、当然のことながら現在の寡婦年金制度はない。だからこの夫人には一人息子が唯一の生きる助けだった。息子がいてくれるから今日も生きていける。息子が稼いでくれるから今日も食べていける。その日暮らしの小さな希望と喜びをつなぐ日々のなかで、その息子が死んだ。わずかな持ち物だった小さな希望と喜びを失い弔いの列で号泣する母の姿に、主イエスは深い憐れを感じた。「憐れ」は原語で「はらわたがよじれてキリキリと痛む」という意味の単語らしい。それほど深く母親を思いやった主イエスは歩みより、「もう泣かないでよい」と穏やかな声をかけて息子の棺に触れた。

その時人々は息をのんだ。死体や、遺体のはいった棺に触れた人は汚れてしまう。律法(民数記 19:11-13)にある細かい規定通りに清めないと、「イスラエルから断たれる」とまで書かれている。人々に神殿で教える立場にある主イエスが、それほど物の掙をもとせず棺に触れたことは信じがたかっただろう。しかしその彼らをよそに主は棺に向かって「あなたに言う、起きなさい」と声をかけた。すると死んでいた若者が生き返った。人々の驚き、特に母の驚きはいかほどだったか、想像にあまりある。



私はここを読んだとき、かつて小学校時代にいじめに遭い、「下山は汚い。こいつに触れると病気がうつる。」と言われて皆に遠ざけられ、挨拶しても誰からも返されず、グループワークでは入れてもらえず、何をやっても認められず、研究発表をしても私だけ拍手をもらえない、私と言う人間がいることを皆に無視されていた時代を思い出していた。完全な孤独は殺人に等しい。この状況は中学に進学しても、学区外の高校へ移っても続き、自分の存在が認められない状況の中で、私は自分が生きている意味がないことを学習し、命を絶つことしか考えていなかった。しかしもう一人の自分が私を殺すことができず、行き場を失って毎日泣き暮らしていた。その私の心に音楽を通して主が触れてくださり、私は自分に生きる価値があることを知った。

私は主に触れられて命を吹き返した。そして、私が入っていた棺の横で号泣し続けていたもうひとりの私は、失っていた希望と喜びをふたたび受けることができた。ハレルヤ。

主は、キリストの香りがほとんどない遠くアジアに生まれ、キリストの教義を知らずに育ち、キリストの愛に無関心か拒否してきた私たちにも、「汚い」というレッテルを貼られるような人にも、また人には言えない汚点を胸に秘めて悩んでいる人にも、深い憐れみを感じて歩み寄り、ご自分が汚れることはもとせ私たちに触れてふたたび希望をもって生きていく力をお与えくださる。主は愛の方であり、私たちの人生に無関心ではおられない。この事を気づかされました。ひとりでも多くの人がこの恵みにあずかりますように。

「まことに人間をこのように救うことのできる神はほかにはない。」ダニエル書 3 章 29 節

文責：下山